

報 告

JDS留学生に対する会話パートナー

横林 宙世

〈要 旨〉

本稿では2003年度から2010年度までの8年間、本学学生が夏季休暇中にボランティアで参加した、日本国の無償資金協力対象国の若手行政官や実務家、研究者、即ち「JDS留学生」に対する会話パートナー・プログラムの内容と参加学生の学びについて彼女らの毎回の報告レポート、アンケート、筆者への口頭のフィードバック等を通して考察する。JDS生は来日後2ヶ月ほど日本語の授業を受けて、秋から大学院で各自の専門領域の研究を深め2年後に帰国し、母国の発展に寄与するというものである。本学学生は彼らの日本語の授業終了後の放課後に1時間ほど会話相手となり、多くのことを学んだ。

キーワード：JDS留学生、会話パートナー、ボランティア経験、相互交流からの学び、多文化的視点

0 はじめに

本稿では日本語教員養成課程の履修生を中心に、2003年から2010年まで8年間夏季休暇中に実施したJDS留学生に対する会話パートナープログラムについて報告する。これは八幡にあるJICA九州センターで日本語を学び、その後大学院に進み、母国の発展に寄与しようという高い志を持った留学生達の会話相手になり、彼らの日本語運用力向上のお手伝いをするボランティア・プログラムである。

本プログラム留学生を受け入れていた財団法人日本国際協力センター（JICE）はホームページで以下のようにこのプログラムを説明している。

JDSとは留学生支援無償事業（Japanese Grant Aid for Human Resource Development Scholarship）の略で、日本国の無償資金協力対象国において、社会や経済の開発計画や立案の実施に関わり、21世紀の指導者となることが期待されている優秀な若手の行政官や実務家、研究者などの人材を育成することを目的としたプログラムである。さらに、それぞれの留学生が、日本の良き理解者として、両国の友好関係の基

盤を拡大、強化していくことも期待されている。本プログラムを通じて日本に受け入れられた留学生は、日本の大学院で専門的な知識を習得すると共に、研究を通じて人的なネットワークの構築も行い、帰国後は自らの国が直面している社会・経済開発上の課題を実践的に解決する知識を持つ人材として活躍することが期待されている。

対象者は官公庁、研究機関等勤務の幅広い分野の人々で、帰国後それぞれの分野でリーダーシップを発揮し、母国の発展に寄与する意志のある人々、また、留学を通じて日本との交流を深め、両国の関係を強化しようという志のある人々としている。応募資格は、当該国の国籍を持ち、22歳以上35歳以下で学士号を取得済、英語が堪能、2年以上の職歴を有することである。

2003年に受け入れた留学生の対象分野は、法律、行政、経済、経営、国際関係、情報通信、教育、工学、農業、医療行政、環境政策、公共政策の12分野で、出身国はウズベキスタン、ラオス、カンボジア、ベトナム、モンゴル、ミャンマー、バングラデシュ、中国、フィリピン、インドネシアの10カ国、受け入れ大学は全国で12大学・大学院である。帰国後、直ちに政府の中核

で政策立案等の実務に携わることが可能なように、学習言語は原則英語で学位は修士である。

1 本学学生の関わったJDS会話プログラム

1-1 JICEの日本語クラス

九州地区では八幡のJICA九州研修センターにおいてJICE派遣日本語講師の指導の下に留学生は来日後初めて日本語を学ぶ初級クラス（全学習時間200時間）と、母国で160～200時間学習の後來日し、センターで200時間学習し初級を終了する）既習クラスのいずれかに属し、約2ヶ月集中的に日本語を学ぶ。但しプログラム終了の2010年度は既習クラスの学生はおらず、ゼロレベルで来日し100時間のみ学習するクラスが実施された。留学生は10月から九州大学大学院、あるいは立命館アジア太平洋大学院でそれぞれの専門を学ぶ。両大学の受け入れ研究科は九州大学大学院は法学府／生物試験環境科学府、立命館アジア太平洋大学大学院はアジア太平洋研究科／経営管理研究科である。

1-2 留学生の出身国および専門分野

九州センターで学ぶ留学生の出身国はインドネシア、ミャンマー、カンボジア、バングラデシュ、ウズベキスタン、ラオス、キルギス、モンゴル、ベトナム、フィリピン、タジキスタンの11カ国にわたっている。開始年度より継続して8年間留学生が来日しているのはベトナム、2009年まで7年間留学生が来日しているのはカンボジア、2004年度から7年間留学生が来日しているのはミャンマーである。ウズベキスタンは2003年度から7年度まで、ラオスは2005年度から9年度を除いて10年度まで5年間、モンゴルは2007年度から10年度まで4年間留学生が来日している。中にはフィリピンやタジキスタンのように1、2回のみのももある。

JICEのホームページによれば、開始2年目の2004年の各国の留学生の専門分野は以下の通りである。

ウズベキスタン	法律、行政、経済、経営、情報通信、工学
ラオス	法律、行政、経済、経営、国際関係、農業、教育、工学
カンボジア	法律、経済、国際関係、農業、情報通信、医療行政、工学

ベトナム	法律、経済、国際関係、農業、情報通信、環境政策
モンゴル	法律、行政、経済、経営、情報通信、農業
バングラデシュ	法律、行政、経済、国際関係、情報通信、教育、医療行政
ミャンマー	法律、経済、経営、情報通信、農業
中国	法律、公共政策、経営、経済、国際関係、医療行政
フィリピン	公共政策、経済、経営、情報通信
インドネシア	法律、公共政策、経済、経営、国際関係、情報通信

1-3 本学学生の会話パートナーとしての役割

留学生は教室で日本語を学ぶが、なかなか実践練習の場がない。そのため日本語教員養成課程を教えている筆者にJICEから打診があり、日本語教員養成課程履修中の本学学生にJDS留学生の会話練習の相手をしてもらうことにした。筆者には赴任当初から前任校と比較して本学の学生は内向き思考という印象が強かった。放課後留学生の会話パートナーをする機会は異文化を知る大変良い機会でもあるし、母国の発展のために日本で専門領域の知識を深めようという志の高いJDS留学生に教室で学んだ日本語を使って日本人とコミュニケーションを取る練習相手として日本語会話の相手をするというのは彼女達にとっても学ぶことの多い体験となるであろうと考えた。大体8月～9月の週日の午後JICA九州センターに出向き、ロビーで複数の留学生と複数の本学学生がグループとなって1時間～1時間半ほど自由に会話をする。授業中にプログラムについて説明し、掲示も出して参加者募集をしたところ、多くの学生が高い関心を示し初年度（2003年）は20名の学生が参加した。

報告者は赴任以来2003年から8年間にわたりJICAの九州センターで夏季休暇中にこの会話パートナープログラムを実施した。残念ながらこのプログラムは事業仕分けの予算削減により2010年度をもって終了することになった。最終年度の参加者は17名であった。複数回参加の学生も合わせると8年間に100名以上の学生がこのプログラムに参加しボランティア経験をしたことになる。学生達は人文学部の学生が主で初期には日本語教員養成課程履修生が多かったが回を重ねるにつれ、一般の学生参加も増え、最終年度の10年度には友人等から伝え聞いた保健福祉学部の学生や短期大学

部の学生にも多くの参加希望が出たため、JICE教員の許可も得て彼女達も参加するようになった。

会話練習はJICEの指導教員が作成した日本人学生と留学生の組み合わせ表に沿って行った。原則的に日本人も留学生も複数で1グループを作り、会話をした。初回のオリエンテーションや授業見学等には筆者も参加したが、その後は学生の連絡網を作成しリーダーとサブリーダーを決め、彼らが主に参加学生とJICE教員との連絡等をする形をとった。毎回の会話練習の後、その日の内容や感想をB5サイズの紙にまとめ、ファイルをさせた。ファイルは指導教員も見られるようにJICEに預けた。各学年のプログラム終了後、参加学生にアンケートを実施し、翌年の参考とした(付録参照)。

以下ではアンケートや日誌を通して、本学学生達の学び、気づき等について報告する。表1に初年度である2003年度、表2に2004年度、表3に2005年度のアンケート結果を示す。

表1 2003年度 アンケート

- ①非常にそう思う ②ややそう思う
③あまりそう思わない ④全くそう思わない

		①	②	③	④
会話パートナーの経験は自分にとって有意義なものだった	合計	16	3	0	0
	2年	9	1	0	0
	1年	7	2	0	0
留学生の日本語習得の手助けになった	合計	5	10	3	0
	2年	3	3	3	0
	1年	2	7	0	0
留学生の日本語理解の手助けになった	合計	10	5	3	0
	2年	4	2	3	0
	1年	6	3	0	0
日本の文化・習慣等についての知識の重要性に気づいた	合計	16	3	0	0
	2年	10	0	0	0
	1年	6	3	0	0
日本語を教えることへの興味・関心が増えた	合計	14	9	0	0
	2年	10	0	0	0
	1年	4	5	0	0
日本語についての興味・関心が増えた	合計	13	6	0	0
	2年	8	2	0	0
	1年	5	4	0	0
毎回パートナーが変更するのは色々な人と話せて良い	合計	12	7	0	0
	2年	8	2	0	0
	1年	4	5	0	0
JICへ出かけるのは大変だった	合計	2	11	3	3
	2年	0	5	2	3
	1年	2	6	1	0
来年度もこの活動に参加したい	合計	19	9	0	0
	2年	8	2	0	0
	1年	2	7	0	0

表2 2004年度 アンケート

- ①非常にそう思う ②ややそう思う
③あまりそう思わない ④全くそう思わない

		①	②	③	④
会話パートナーの経験は自分にとって有意義なものだった	合計	20	6	0	0
	3年	8	0	0	0
	2年	9	1	0	0
	1年	7	2	0	0
留学生の日本語習得の手助けになった	合計	4	17	5	0
	3年	1	5	1	0
	2年	3	7	3	0
	1年	7	1	3	0
留学生の日本語理解の手助けになった	合計	3	18	5	0
	3年	1	6	1	0
	2年	1	7	1	0
	1年	1	5	3	0
日本の文化・習慣等についての知識の重要性に気づいた	合計	19	6	1	0
	3年	7	0	1	0
	2年	8	0	0	0
	1年	4	3	0	0
日本語を教えることへの興味・関心が増えた	合計	15	9	1	0
	3年	5	2	1	0
	2年	7	2	0	0
	1年	3	5	0	0
日本語についての興味・関心が増えた	合計	16	9	0	0
	3年	5	2	0	0
	2年	7	2	0	0
	1年	4	5	0	0
毎回パートナーが変更するのは色々な人と話せて良い	合計	18	8	0	0
	3年	7	1	0	0
	2年	7	2	0	0
	1年	4	5	0	0
JICへ出かけるのは大変だった	合計	5	10	6	4
	3年	0	2	3	2
	2年	3	4	1	1
	1年	2	4	2	1
来年度もこの活動に参加したい	合計	19	9	0	0
	2年	8	2	0	0
	1年	2	7	0	0

表3 2005年度 アンケート

参加者3年7名、2年10名、1年9名 計26名 但し本アンケートへの回答は任意のため、回答数と参加者の数は一致していない。無回答はNで示す。

- ①そう思う ②ややそう思う
③あまりそう思わない ④全くそう思わない

		①	②	③	④
会話パートナーの経験は自分にとって有意義なものだった	合計	19	6	0	1
		7	0	0	1
		6	3	0	1
		5	3	0	0
留学生の日本語習得の助けになった	合計	4	17	5	0
		2	5	1	0
		2	7	0	0
留学生の日本語理解の助けになった	合計	10	5	3	0

	4	2	3	0
	6	3	0	0
日本の文化・習慣などについての知識の重要性に気づいた	16	3	0	0
	10	0	0	0
	6	3	0	0
日本語を教えることへの興味・関心が増えた。	14	9	0	0
	10	0	0	0
	4	5	0	0
日本語についての興味・関心が増えた	14	6	0	0
	0	0	0	0
	0	0	0	0
毎回パートナーが変更するのは色々な人と話せて良い	N	N	N	N
	N	N	N	N
	N	N	N	N
JICEへ出かけるのは大変だった	0	0	0	0
	0	2	3	0
	0	0	0	0
来年度もこの活動に参加したい	N	N	N	N
	N	N	N	N

1-4 会話パートナーの内容

ここでは毎回の会話パートナーのレッスン後に本学参加学生が記した日誌から具体的な会話パートナーの内容を示す。キーワードに示した「相互交流からの学び」、「多文化的視点」に注目して数例を報告する。

例1：2007年8月13日（月）17時半～18時半 チューター2名、キルギス人留学生2名 お互いの自己紹介後、留学生はパソコンを使って母国の紹介VTRを見せてくれた。日本人学生は東欧の小さな国のことを初めて知った。そして熱心な学習態度に感銘を受けた。

例2：同じ日に他の2名はミャンマーの学生2名と話し合った。やはり積極的に話しかけられ楽しい時間を過ごしたようだ。両国の食文化について話したり、自分の夢について語ったりしたようだ。ミャンマーの学生は日本人学生の将来の夢について「その夢がかなうように、幸せを祈っている」と応援してくれたと記している。

例3：同年8月29日（水）17時～18時、チューター2名、カンボジア留学生2名。1名の留学生は英語をよく使った。もう1名は週末によく出かけるそうで門司や折尾に行ったとのこと。アンコールワットについて教えてもらい絵葉書までもらってしまった。スポーツや音楽についても話した。日本の学生と違ってカンボジアの学生は殆どアルバイトをしないようだ」と記している。

例4：2008年8月11日の日誌では2名の学生が5名の留学生（モンゴル1名、キルギス4名）とカタカナの復習、自己紹介、趣味など英語交じりではあったが楽しく会話をした。

例5：同日、ベトナムの学生3名と話した西南生3名はベトナム語での名前の書き方を教わったり、当時開催されていたオリンピックの話で盛り上がりたりした。

例6：9月10日（会話パートナーの最終日）にラオス出身の学生1名と会話をした2名はJICEでの日本語の授業について話した。ラオス人学生はテストや宿題が沢山あって頭が「ズキズキする」と言っていたそうだが実はペラペラだった。参加学生はその日が最終日なのが残念でまた来年も参加したいと日誌に書いている。

例7：翌2009年8月10日の日誌でバングラデシュの学生と話した学生はバングラデシュのことを教えてもらい知識を広め、留学生が10年間銀行で働いていたということを知りて尊敬の念を抱いたと記している。

例8：ベトナム人の留学生と話した学生は、反省点として相手の発話に対して疑問があっても深く問わずに流してしまっただけをあげている。教える側でも留学生のわかることに置き換えて質問し、もし相手がわからなかったら日本語で別の表現を何度も言うことが大切なのだと思ったと記している。

例9：バングラデシュの留学生3名と話した学生は初めての会話パートナー経験でしっかりしたことを話さなければ、との思いが強く硬い話題をふってしまった。その時パートナーの学生が「日本の食べ物は何が好きですか？」等の質問をしてくれ、留学生が「寿司です」と答え、打ち解けた空気を作ることの大切さに改めて気づいた。またパートナーが旅行パンフレットを持ってきてくれたのでそれを見ながら話が弾んだ、と記している。

例10：2009年8月17日に例9と同じ学生が九大大学院ベトナム人留学生2名と1時間話して「とても楽しかった。二人ともとても明るくて会話がとぎれることはなかった。留学生は既習の文型を使って会話をしようという姿勢が見てとれたので思い出す手助けをしたりした。手助けができてとても嬉しかった。日本のことについて知ること大事だが「福岡（市）のこと」について知ることの重要性を感じた、と記している。

以上10例のみ記したが合計8年間にわたり延べ100名以上の本学学生が普段は知ることの少ない国々の志の高い人々と交流し、多くの刺激と学びと気づきを体験し、自分たちの視野を広げる機会を持てたのは筆者にとっても幸せな体験であった。

付 録

JDS留学生への会話パートナーについてのアンケート

パートナーになった留学生___名（初級___名（既習___名）

同じ留学生と複数回パートナーになりましたか？ はい___名___回：いいえ

1 以下の質問には1 [非常にそう思う]、2 [ややそう思う]、3 [あまりそう思わない]の中であなたの考えに最も近い番号を選んで下さい。

- パートナーの経験は全体として自分にとって有意義なものだった。
- 留学生の日本語習得の手助けになった。
- 留学生の日本理解の手助けになった。
- 日本の文化や習慣等についての知識の有用さに気づいた。
- 日本語を教えることへの興味・関心が増えた。
- 毎回パートナーが変更するのは色々な人と話せて良い。
- JICAへ出かけるのは大変だった。
- 来年度もこの活動に参加したい。
- JICAでのオリエンテーションはパートナーの際の役に立った。
- 文型リストで学生の既習事項が分かったのは教える際役に立った。

2 会話パートナーの時に話題は主にどんなことでしたか？

3 会話をする際に何か困ったことがありましたか？

4 会話パートナーをして不満に思った点について書いて下さい。

5 その他気づいたことがあれば書いてください。

裏に会話パートナー体験記として自由のまとめの簡単なレポートを書いて下さい。

Conversational Partners for JDS Students

Hisayo Yokobayashi

<Abstract>

This is a report about the volunteer experiences of Seinan Jogakuin University students during their summer vocations from 2003 to 2008 as conversation partners for JDS (Japanese Grant Aid for Human Resource Development) students. JDS students study regular morning Japanese lessons. JDS students and Japanese students chat for about one hour in the lobby of JICA Center in Yahata, Kitakyushu. The writer asked these volunteers to write a daily journal and complete a questionnaire at the end of every summer program. It is clear that these Seinan Jogakuin University students learned a lot from this experience.

Keywords: JDS students, conversational partners, volunteer experiences, learning from interaction, multicultural perceptions